



発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話 042-558-2663

お盆・七月十三日(迎え火)から十六日(送り火)
お施餓鬼法要・七月十七日(金)十一時より
八月十八日(日)十一時より
本年のお施餓鬼法要は参列者なしで厳修致します。

先祖供養の大切さ「いのち」の流れの継承

先祖供養とは文字通り「ご先祖の霊を供養すること」であり、また、「そのために営まれる仏事のこと」を指します。ただ、仏事と言っても仏教経典には先祖供養に関する記述はありません。この先祖供養の教えは仏教ではなく、日本の古くから伝わる「祖霊信仰」・「祖先崇拜」からきているとされます。「祖霊信仰」・「祖先崇拜」とは、既にこの世にいない先祖が、現世で生きている者の生活に影響を与えるとされる信仰です。このような祖先を大事にする信仰、「祖霊信仰」・「祖先崇拜」が、仏教の教えと結びついて、「先祖供養」の習慣が生まれたと考えられています。古くはインドで死者を慰め供養する「盂蘭盆会」が発祥とされる「お盆」や中国の浄土思想に基づいています。年忌法要や春・秋の「彼岸」・「お盆」の他、お墓を建立し自宅に仏壇を設けることも「先祖供養」です。

近年、少子高齢化や生活様式の変化に伴い、墓仕舞いをしたり、仏壇を処分したりする人が増えていたりいます。この現象の背景には戦後の核家族化があり、子供達が独立して「家」を出て、親が亡くなれば「家」は否応なしに途絶えてしまいます。「家」の跡継ぎがいなければ、代々の供養継承も難しくなります。

しかし、供養というのは、ただ単に個人や先祖のために行う儀式ではありません。それはむしろ、後に残された者による宗教的生きかたでもあるのです。供養の営みを通して、家族は故人や先祖に守られていくという「いのち」の流れがあるのです。お墓の維持や供養の気持ちはあるけれど、家族の核家族化や高齢化・遠距離のため墓地の維持が困難になったり、墓参りが難しくなったりすることはやむを得ないことはありません。

しかし、供養を途絶えることなく続けることで、「いのち」は過去から現在、そして、未来へと流れていくことができるのです。先祖供養や年回忌の法事は、亡くなった人への悲しみを通して、知人や親戚を温かく繋いでくれるのではないのでしょうか。

昨年、お檀家のI様から「主人の三回忌に当たり法事

宝清寺の年中行事	
二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリンダ
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お会式法要
十二月初旬	お盆金締札

で、命日当日にお花とお供物を供えて住職にお経をあげて貰うわけにはいかないでしょうか」と相談を受けました。「ご供養の気持ちが大切ですから」とお受けして、ご命日当日、本堂で三回忌法要を行い、お墓にもお花を供えてご供養させて頂き、ご報告のお電話を差し上げたところ、「気持ちがつきりました」と、大変喜んで下さいました。以前にも「遠方に転居したためになかなかお寺に伺えないので、お寺でご供養をお願いできませんか」との相談が数件あり、実施させて頂き大変感謝されたことがあります。

家族の規模縮小や社会情勢により供養の方法は変わっても、供養を途絶えることなく続けることは、縁あって家族となったそれぞれ一人一人の務めではないでしょうか。

住職ひと口法話

未だ、新型コロナウイルスの終息の目処がたたない。

学生時代に小林秀雄や亀井勝一郎などの著書をよく読んだ。誰のどの著書かは不明だが「人間は天然資源を求め、森林をはじめとして大規模な自然破壊を続けている。環境を軽んじている人類に自然界から逆襲があるかもしれない」という内容の文があったことを思い出した。エボラ出血熱、鳥インフルエンザ、サーズ、マーズ、そして今回の「新型コロナウイルス感染症」。近年人類の天敵であるウイルスが世界中で次々と襲いかかり、そのたびに多数の犠牲者を出している。『感染症の世界史』の著者石弘之氏は「自然破壊により野生動物がすみかや餌を失い生態系を乱され人の生活圏に出没するようになった。それまでは明確だった人と野生動物との境界が曖昧になり野生生物が人間の近くにいた動物(家畜・ペット)などを介して、新しいウイルスを拡散させる。また、世界での肉食の広がりや、増える家畜も、感染症の拡大や新しい病気を生んでいる。渡り鳥の越冬

慶讃事業奉納お願い

日蓮聖人の生誕八〇〇年記念勸募は令和三年まで実施しております。当山の目標額はあとわずかになりました。ご協力頂ける方は、一口五、〇〇〇円です。

多摩信用金庫秋川支店 普通 一五〇五八四一
宗教法人 宝清寺 代表役員 石井前琮

日蓮聖人の教え (陰徳陽報御書)

『陰徳あれば 陽報あり』

本書は四条金吾氏に与えられたお手紙です。四条氏の強情な法華経信仰は主君や同僚から何度も迫害を受けることになったのですが、相手の成仏を願う至誠の行動を貫いた結果、ついに事態が好転しました。日蓮聖人は相手に理解されなくとも陰徳を積むことは、必ずや大いなる功德となつて報われると説いています。そのためにはじつと堪える忍耐力が重要なのだと励ましています。以前、御会式の時に仏教経典にある「懸清流・受恩刻石」(自分が人に施したことは忘れ、人から受けた恩はその人に返すのみならず、より多くの人に施すこと)と色紙をかざして話したことがあります。「誰かがあなたの力になっている。あなたも誰かの力になっている。誰かが誰かの力になっている」世の中だと言う事を忘れないようにしたいものです。

地などになる湿地が、近年、どんどん消失している。これが、鳥インフルエンザに影響している。更に、世界各国で都市化による人口集中で、過密社会になったことが、感染症の急増に拍車を掛けている。」と指摘している。

ペストは十四世紀のヨーロッパ、そして世界を恐怖のどん底に陥れ、人口の三分の一が亡くなるという異常事態だった。単に人口が減っただけでなく、ヨーロッパの中世社会を根底から覆した。権力構造ががらりと変わり、封建社会が崩れた。それが、ルネッサンスであり、教会が支配していた「暗黒の時代」と決別し、人間を解放する運動であった。その時期に、科学者としても名を刻んだ「モナリザ」が代表作のレオナルド・ダ・ヴィンチやニュートンなど多くの偉人が誕生した。ニュートンはペストの流行でケンブリッジ大学で研究生活を送るつもりだったが二年間休校になり故郷に帰り、「万有引力」や「微分積分」の考え方を発見した。その期間を後に「創造的休暇」と呼んでいる。

新型「コロナ」で今、世界は混乱している。「新型「コロナ」後には古い時代」と決別して、新しい時代が始まる。ダ・ヴィンチやニュートンが現れるか、後世の人から叱られないようにしたいものだ。

法華経と私たち

第五回

薬草喩品第五

薬草喩品は釈尊が自分の説法を草木に注ぐ雨にたとえて説明される。

釈尊は摩訶迦葉及び弟子達に語った。「迦葉よ、如来は諸法の王であり、真実を説き、また方便で説き、説くところは全て本質を究めている。一切の事象の帰趨するところを見極め、またすべての衆生の所業を知っている。そして、智慧を開示して、衆生に知らしめるのである。迦葉よ、三千大千世界には山川や溪谷があり、様々な草木や樹木や薬草などが生い茂っている。水をいっばい含んだ雲が沸き上がり、三千大千世界にあまねく降りそそぎ、乾いた大地を潤す。雨は、小さな根、小さな茎、小さな葉、小さな枝を潤し、また中位のものの、大きいものすべてを潤す。

樹木は等しく、大小それぞれの種によつて受け、種に応じて成長する。雨を受けた場所により、草木の種類によつて差別されることはない。迦葉よ、如来もまたこのようなものである。如来が世に出現するとき、おきな雲が湧きあがつて雷鳴をとどろかせるように、大音声を響かせて生きとし生けるものに告げ知らせ、雨が三千世界を潤すように、衆生に降りそそぐのである。

そのとき如来は衆生のなかにいて、このように説くのである。『わたしは如来であり、諸法の王である。未だ悟りの彼岸に渡れないものは渡らせ、未だ心の平安を得ていないものは安らかならしめ、未だ涅槃を得ていないものは涅槃に至らしめる。わたしは現世と来世の一切を知るものであり、一切を見るものである。道を知るものであり、道を説くものである。みな来たりて、法を聴け』。そこへ幾千万という衆生が来て法を聴くのである。如来は、この衆生の一人ひとりの利と鈍、努力と怠けの程度により、その機根に応じて法を説くのである。おきな雲が三千大千世界の等しく雨を降らし、草木はそれぞれの種によつて潤い、種に応じて成長するものである。如来の説くところは一味の雨であるが、衆生はそれによつて得る様々な功德を知ることがないのである。雨に潤う草木が、自らの種の違いを知ることがないように。

迦葉よ、お前たちが、如来の宜しきに従つて聴いてよく信じ、よく理解したのは希有のことである。諸法の方便による説法は深く、理解し難く知り難いからである。」釈尊はこのように語ると重ねてこの意味を伝えようとして、詩句をもつて唱えた。

『この道四〇年に寄せて』

八名、二〇〇〇年（平成十二年）ニューヨークカーネギー・ホール（参加者二〇二名）など、世界屈指の大ホールで成功を収め、その後、モンゴル・オーストリア・ドイツ・スイス・フランス・イタリア・カナダで海外公演を実施され、延べ一二三四名の会員が参加しています。

平成十五年には各会派の家元・会主五人で、新しい大正琴の世界の発見と自己研鑽のため「五人楽女（ごにんらくじょ）」のグループを結成、更に大正琴扇靖流演奏曲集基本編・第一集、第八集・童謡集等の楽譜を出版するなど精力的に活動をされています。

今年（今年）は創立四〇周年を迎えるに当たり、家元 岩佐扇靖様から、『この道四〇年に寄せて』と題するお手紙をお送り頂きましたのでご紹介いたします。

『昭和五十三年秋、小さなお稽古場から「弦」のひびき。その音色は静かでやさしく、そしてどこか懐かしく……。魅かれて訪ねてみると見たこともない小さな楽器から「荒城の月」のメロディが流れてくる。それは私が初めて聴く音。初めて見る楽器……。私と大正琴の最初の出会い。大きな感動でした。』

私が「縁」という「糸」に引き寄せられるようにたくさんの方々との出会いがあり、昭和五十六年に最初の教室を秋川市（現在あきる野市）二宮神社会館にて開講し四十一年。この日を迎えて記憶を辿りながらこれまでの道のりを振り返れば、ただただ感慨一入といったところでございます。

第一回の教室十五、十六名から出発し、その後、「おさらい会」を催すごとに会員が年々増加し、ちようど世の中は高齢者の生涯学習ブームに入り、大正琴が全国で大いに活躍する時代になりました。

日本国内のみならず、いち早く私は海外公演に目を向け、日本人が考案した楽器での日本音楽文化を海外に発信できればと考えていた矢先に、中国天津公演のご縁を頂き、その後九回の海外公演（延数一、〇〇〇名）が扇靖流全体の活動と原動力となり、この経験を生かして地域催事、施設慰問ボランティアに年間三五〇名以上が活動力を発揮しております。

しかし、このような大きな活動は私一人ではできるものではなく、常に会員全員の信頼とチームワークの素晴らしさが基本になっていると思います。

私自身、四〇年前最初の講座は指導もしどころもどろ、大正琴の未熟さ、無能さゆえに戸惑うことばかり。今思い出しても背筋が寒くなる思いです。

そのような時に救われたのは、出会う会員一人一人から頂く知恵と力、元氣と勇氣を与えてくれる力強い言葉、やさしさ、すべてが私を成長させ育てて頂き、パワーの源となりました。

まさに皆様との出会いは私の「道しるべ」でございます。大正琴の音色が日本人の持つ音楽の琴線にふれた時、心は癒やされ、懐かしさ、希望、輝き、喜びがあふれ、まさに、「心を聴く」楽器であり、この小さな楽器が大勢の方々と共に喜びを分かち合えるということは、大変に意義深いものでございます。

四〇年の新たな「山吹光」として、これまでの様々な経験と皆様から育てて頂いた知恵と力などを生かしながら、弾く人、聴く人全ての方々に、大正琴を通して生き甲斐と喜びのお手伝いをさせて頂ければと念じています。

『延が一日も早く終息して、扇靖流四〇周年記念公演の成功と今後の活躍をお祈りしています。』

お檀家ご紹介

大正琴

扇靖流家元

岩佐扇靖様



お檀家の岩佐扇靖（靖子）様は平成十七年四月にご主人の岩佐隆夫様が亡くなられてからの縁で、「鰐口」（当山の七面堂正面軒下に扁円・中空で下方に横に長い口のあたる、棕櫚で編んだ綱で打ち鳴らす）を奉納されるなど、ご供

